

仲秋のあまじない 赤山禪院



秋空に映える比叡山を正面に、音羽川に沿ってゆるやかな坂道を歩く。ここは修学院、まつすくへ行くと東にある修学院離宮へと続く修学院離宮道です。鸞森神社の御旅所がある分かれ道の石仏にご挨拶し、「左赤山道」と、石の標の示すままに進めば、目的地、赤山禪院の石鳥居が迎えてくれます。お寺なのに鳥居?と思われるかもしれませんが、こちらのお寺のご本尊は、仏さまではなく「赤山大明神」という神さま。神仏習合の名残をとどめる独特なお寺なのです。続く山門をくぐり、緩く弧を描く参道へ。石積みに苔、楓、石灯笼。都七福神の色鮮やかなのぼり旗が、木々の間からゆらゆら揺れて「ようきたね」と、いつも笑顔で迎えてくれるようほっとします。

赤山さんは、平安時代に慈覚大師円仁の遺命により、弟子の安慧が創建。ご本尊は、唐の赤山にあった泰山府君を勧請した赤山大明神。円仁さんの遣唐使船での旅路を守護したという神さまで、日本の陰陽道の祖神さまです。お寺は京都の北東、表鬼門に位置し、皇城の鎮守、守護の神として祀られています。また、拝殿の屋根瓦の上には、御幣と神楽鈴を持ったお猿さんの姿をした神猿が鎮座しています。御所の「猿ヶ辻」



拝殿の屋根

お猿さん

のお猿さんから始め、比叡山を越えて日吉大社のお猿さんまで鬼門守護のお猿さんラインです。このお猿さん、かつては夜な夜なおいたをしたので、今は金網の中に入れられているのだ……なんて面白いお話もあるんです。菊の御紋の瓦もみられ、天皇家との深い関係も窺い知れますね。



お寺は比叡山の千日回峰行とも関わりが深く「赤山苦行」で知られます。境内の不動堂は、かつて比叡山延暦寺と赤山禪院を結ぶ雲母坂にあった雲母寺の本堂と、伝教大師最澄の作とも伝わるご本尊、不動明王が移されたもの。雲母寺は平安時代、千日回峰行の創始者、相応和尚が開いたお寺でしたが、明治に入って廃寺となりました。なので現在でも赤山禪院では、伝統により護摩供他、加持、祈禱が千日回峰行を修めた大阿闍梨により執り行われています。

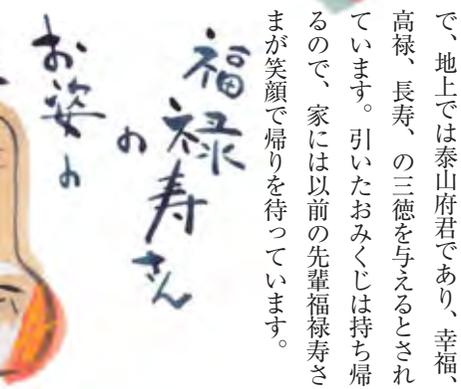
私も何年前か前に原因不明の咳に悩まされた時期があり、このお加持に行きました。当日お加持を申し込むと、お堂で阿闍梨さまが加持祈禱をしてくださります。「へちまの御贖」と破魔矢が授与され、境内では喘息によいというへちま入りのお汁と粗飯、抹茶などが振る舞われます。翌日には忘れずに、持ち帰った「へちまの御贖」の袋を開きます。中は加持され乾燥させたへちまと、塔と梵字が描かれた御贖です。乾燥へちまを家の庭土の清浄な所に埋め、水を注ぎ、光明真言を唱えてから、御贖の梵字を三文字分くらい小さくちぎって口にふくみ、コップに残した水と一緒に飲むという作法に従って、二十一日間欠かさず祈願します。

お陰さまで、私の一年ほど続いた咳もきれいさっぱり治まりましたし、うれしいことに光明真言もそらで言えるようになりました。さて、せっかくなのでおみくじのひとも引いてみましょうね。境内の奥の福祿寿堂で迎えてくれる福祿寿さんのお姿みくじです。へちまのように長い頭に白いお髭、こけし職人さんによってひとつひとつ手描きされた笑顔を選ぶのも楽しいです。福祿寿神は、天にあってのお姿で、地上では泰山府君であり、幸福、高祿、長寿、の三徳を与えると考えられています。引いたおみくじは持ち帰るので、家には以前の先輩福祿寿さまが笑顔で帰りを待っています。

いつもなら、この後、美しい景色に誘われて修学院離宮や曼殊院さんへ足が向くのですが、今宵は中秋の名月。観月祭が行われるお寺や神社もあるので、まあいいお月さまを愛でに、さらに寄り道するのもいいかもしれません。秋の澄みきった夜空のお月さまは、いつまでも眺めていたいもののひとつですものね。

その大阿闍梨によるありがたい行事のひとつが、毎年、仲秋に執り行われる「ぜんそく封じへちま加持」。古くから中秋の名月の日に厳修されてきた天台の秘法で、へちまに喘息や気管支炎を封じ込めて加持祈禱をします。中秋の名月、つまり満月の日に行われるのは、欠けてゆく月を病に見立て、病が小さくなっ

ていくのを願うことによ



福祿寿の寿さん



へちま加持 破魔矢



〈こばやし ゆきえ〉
京都・下鴨生まれ。大学で日本画を学び、卒業後は本、雑誌、広告、新聞、TVCMなど幅広く絵に関わる仕事に携わる。著書に「京都でのんびり 私の好きな散歩みち」、「京都をてくてく私が気ままに歩くみち」、「京都のいちねん わたしの春夏秋冬」がある。

